



故 紺野 昌俊 先生

一般社団法人日本感染症学会名誉会員

1927年10月6日 生  
2021年3月30日 逝

# 故 紺野 昌俊 先生

(2021年3月30日)

## 略 歴

### 【学歴・職歴】

- 1953年 日本医科大学卒業  
1960年 医学博士（東京大学）  
東京大学医学部分院小児科勤務を経て  
1971年 帝京大学医学部助教授  
1980年 同大学医学部教授  
1993年 同大学医学部名誉教授  
その間、日本私立医科大学協会教育委員会委員長等を歴任

### 【学会・社会活動歴】

- ・日本感染症学会（編集委員，理事）  
第66回日本感染症学会総会学術講演会・会長（1992年4月16-17日）
- ・日本化学療法学会・日本臨床微生物学会（理事，理事長，学会長）
- ・日本環境感染学会（理事）
- ・日本小児感染症学会，日本臨床薬理学会（評議員）
- ・厚生省中央薬事委員等を歴任

### 【受賞歴】

- 1986年 日本感染学会 二木賞  
(受賞対象：薬剤耐性型とフェージ型からみたメチシリン耐性黄色ブドウ球菌の研究：感染症学雑誌 第59巻 p1029-1040, 1985)
- 1992年 日本化学療法学会 志賀潔・秦佐八郎賞  
(受賞対象：MRSAに関する一連の研究)

### 【主な著書】

- ・新・抗生物質の使い方：清水喜八郎・紺野昌俊共著（医学書院）
- ・MRSA感染症のすべて 改定版：紺野昌俊編（医薬ジャーナル社）
- ・改訂ペニシリン耐性肺炎球菌：紺野昌俊・生方公子共著（協和企画通信）
- ・抗菌薬療法の考え方（第1巻～第3巻）：紺野昌俊著（株）ミット
- ・インフルエンザとインフルエンザ菌：紺野昌俊著（自費出版）
- ・急性呼吸器感染症三大起炎菌その変遷と未来は？：紺野昌俊著（自費出版）
- ・感染症・老医師の回想録：紺野昌俊著（自費出版）

## 紺野昌俊先生を偲んで

紺野昌俊先生におかれましては、令和3年3月30日に心不全によりご逝去されました。1927年(昭和2年)生まれの先生は多感な10代後半の時期に第二次世界大戦と終戦という激動期を過ごされ、旧満州・大連市から日本に戻られ苦学して日本医科大学を卒業されました。その直後、肺結核を患われ2年間の療養生活を経て臨床医の道を歩みだされたとのこと(随筆集「感染症・老医師の回想録」)。

私が先生の下で研究のお手伝いをするようになったのは1968年(昭和43年)のことで、当時目白台にあった東京大学医学部付属病院分院小児科(医長は故藤井良知先生)の細菌研究室でした。その研究室では「黄色ブドウ球菌の研究」を行っていました。その後ほどなく、藤井先生が小児科教授・副院長、紺野先生が助教授として、約半数の先生方が新設された帝京大学医学部へ異動しました。先生は次第に実務能力を評価され、学内においては附属病院副院長、学生部長、教務部長、医学部長補佐などまさに縁の下での力持ちとして、先生でなければ不可能であったに違いない実質的な責任者として、新設大学の医学部を軌道に乗せることに全精力を傾けられました。先生であるからこそ、病院業務と医学教育の両方をこなせたのであろうと思います。先生は臨床にあっては、早朝7時には病棟へ向かい、入院している小児の朝食状況等をつぶさに観察して臨床経過を推し計り、すべてのカルテに目を通されて不足している検査事項をメモ紙としてカルテに挟み、9時には研究室に戻られて仕事をされておられました。

以下に先生の社会活動としての学問的業績とそれをベースとして本学会に対して尽力なされたことを記したいと思います。

先生の御研究のスタートは、学位の研究テーマであった呼吸器感染症の原因菌である「インフルエンザ菌」であったとうかがっています。当時は培地に加える馬血液を分与していただくため東京大学医科学研究所まで出向いた話をなされていたことが印象的でした。一方、帝京大学ではその後盛んとなった抗菌薬開発の中で新規アミノ配糖当系薬やセフェム系薬などの評価を基礎と臨床の両面から scientific な研究を行い、これらに関連した書籍も著しておられます。

先生がなされた最も社会的インパクトの大きかった業績は、受賞歴にみられますように、「MRSA 研究」ですが、その根底には東大分院時代の「小児・耐性黄色ブドウ球菌感染症」の研究があります。新設大学へ移って10年ほど経過した1983年2月、当時先生は細菌検査部の面倒もみておられましたが、検査技師から見せられた薬剤感受性を測定した1枚のシャーレを研究室へ持参されました。いわゆる「2重リング現象」で、それが MRSA 研究に繋がりました。MRSA 出現の時期は、わが国が高度経済成長期を迎え、人々の生活は豊かになって平均寿命も急速に伸び、加えて国民皆保険制度の下で抗菌薬が潤沢に使用できる状況にありまし

た。2重リング現象の本質は、耐性化しやすい黄色ブドウ球菌における新たな細胞壁合成酵素、すなわち *mecA* 遺伝子にコードされた PBP-2' の誘導産生にあることを明らかにしました。MRSA 関連の英文業績は総計11編、これらの被引用率は非常に高いものです。これら一連の MRSA 研究によって、先生は1986年に本学会の「二木賞」、そして1992年に「志賀潔・秦佐八郎賞」を受賞されておられます。

その後、MRSA は院内感染菌の象徴として社会的な問題となりました。この問題を契機として、1993年(平成5年)に厚生省からの委託事業である「院内感染対策講習会」が日本感染症学会で始まっております。今日、多くの病院には「感染制御部」が設置されておられますが、その元を辿りますと MRSA やグラム陰性桿菌の多剤耐性菌対策にたどりつきます。

先生が本学会会員のたけになされた最大のレガシーは、1995年(平成7年)に「Journal of Infection and Chemotherapy(JIC)」創刊にこぎつけたことです。本誌は当初、日本化学療法学会の Official Journal として単独で定期発刊にいたりしました。この事実を忘れないでほしいと願います。先生には「日本の研究者は優れた研究をしていながら論文のまとめ方や語学にハンディがあり過ぎる。どうしても英文の Journal が必要である。そしてできるだけ早く Impact Factor(IF) を取得する」という明確なポリシーをお持ちでした。当時、英文誌の発刊にあたっては消極的な意見が大変多く、ようやく日本感染症学会との合同の定期刊行物となったのは、2001年(平成13年)の故小林宏行先生(杏林大学医学部内科教授・医学部長)が日本感染症学会理事長になられた時の6巻からのことでした。季刊でスタートした当初に紺野一門が払った犠牲も大きいものがありました。ちなみに印象的な素晴らしい表紙は、故五島瑳智子先生(東邦大学医学部微生物学教授)のセレクトです。

先生は1980年(53歳)に心筋梗塞、1987年(60歳)に直腸がん(輸血後にはB型肝炎)、2000年(73歳)には冠動脈バイパス手術、その後冠動脈ステント術施行、そして2017年(90歳)に直腸がんが再発しましたが、温存療法にて日常生活を過ごしておられました。体調不良の日もあったようですが、それを感じさせることはほとんどありませんでした。ご子息によりますと、ご自身の病歴については薬剤の服用も含めてすべてデジタルデータとして管理されておられたとのこと。そのような慎重さがあったからこそ、90歳を超えてもお随筆集や260ページにわたる膨大な医学思想史を書くことができたのだと思います。先生から発せられた言葉の中では「人間死ぬまで勉強だ」という言葉が私にとっては今でも大変重いものですが、先生ご自身が自ら実践していたことでもありました。

先生の日常の言動から学んだことは多いのですが、その一端を記して感謝の言葉に代え、先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

2021年7月

生方 公子 記

(慶應義塾大学医学部総合診療教育センター・  
一般社団法人日本感染症学会 功労会員)